

Die Spatzen 独文: Berliner Tagesblatt 訳注: 関口存男

おことわり

ある日、独房に蹲踞して、面壁九分、やがて爆弾投下にいたるまでのつれづれに、箱の中の截断した古新聞を取りあげて読んでみると、こういう面白い記事がみつかりました。だいぶん前の新聞で、Berliner Tagesblatt だということはわかるが、何年頃かは不明です。

気持わるがる人があるといけないから断っておきますが、よく匂いを嗅いで下さればわかる通り、臭くもなんともありません。それに、拭いた後の紙をソツとひろげて読んだのなら汚ないが、そうじゃない。まだ拭かない前の紙だったのです。此の点誤解しないようにおねがいします。

Die neue Naturschutz-Verordnung hat über den Sperling ein für allemal (1) den Stab gebrochen.(2) Zusammen mit Krähe, Elster und Eichelhäher ist er als heilloser Übeltäter gebrandmarkt (3) und genießt hinfert keinen Schutz mehr. Das geschieht ihm eigentlich ganz recht. Im Laufe der Jahrhunderte, seit er sich aus einem Steppenvogel zu einer Art von Schmarotzer des Menschen entwickelte, hat er sich alle nur erdenklichen Untugenden angewöhnt.

註(1) ein für allemal: 「断然」、「決定的に」、「最終的に」という熟語。einmal für alle, einmal für immer ともいう。(英: once [and] for all; at once and for ever; for good; for good and all. ---: une fois pour toutes; une bonne fois; une bonne fois pour toutes)

(2) über ~ den Stab brechen: 或人に判決を下す、処断する。(往時、死刑の宣告をする際、裁判官がその杖を折る習慣があったところから来た云い廻し)

(3) als ~ brandmarken: 「.....と烙印を押す」というのは、「.....という汚名を与える」、「.....というレッテルを貼る」(als ~ stempeln). brandmarken は、終身懲役囚の膚などに「焼印をおす」こと。

雀

こんどの自然愛護法令は、断々乎として「雀」というやつを処分してしまった。からすかささぎ、かけすと共に、雀はもはや手に負えぬいたずら者という獄印を捺され、今後はもう愛護されないことになった。これはむしろ当然の処置というべきで、草原の鳥から段々と人間社会の寄生動物と化して来た此の雀というやつは、その間の数世紀において、実にありとあらゆる悪いことを覚えてしまったのである。

Ist es im allgemeinen richtig, daß Tiere, die als Haustiere in des Menschen Obhut und Pflege stehen, im Vergleich zu ihren wilden Verwandten verdummen, so gilt das durchaus nicht für des Sperling. Er hat sich, seiner natürlichen Veranlagung gemäß, gestraubt, Haustiere zu werden. Er benützt zwar die Nistgelegenheiten (4) der menschlichen Behausung, wo es nur irgend angeht,(5) und nährt sich von allen nur erdenklichen Brosamen,(6) die von des Menschen Tische fallen, aber er hat sich bis zum heutigen Tage gehütet, in ein gar zu vertrautes Verhältnis zum Menschen zu kommen.

(4) Nistgelegenheiten: 此の Gelegenheiten は、時間的な意味の「機会」ではなく、空間的な意味の「場所」「地の利」の意。

(5) wo es nur irgend angeht: とにかく何とか都合のつく場所 (がみつきりさえすれば)。es geht an = es ist möglich, es ist tunlich.

(6) Brosam(e). パンのかけら。(パン屑は Krume というがもっと一般的に、なんでも食物の細片を指していることもできるからこれを用いたものであろう。)

動物は、いったん家畜となって人間の保護保育を受けるようになると、その野生の同族

に比して愚鈍化するという。これは、一般的には確かにそうに違いないが、雀だけは断然ちがっている。雀は、その性質上、どうしても家畜になることを肯[がえ]んじなかった。もちろん、どこか巣を作る所があれば、人家を利用するにやぶさかなるものではない。人間の食卓からこぼれ落ちるものがあれば、どんな屑だって喜んで頂戴する。けれども、人間とあんまり近しくすることだけは極力警戒しつつ今日に及んだのである。

So ist der Spatz mit der Zeit der ruppigste,(7) pffiffigste, unverschämteste und, wenn ich bildweise mal so sagen darf,(8) großmäuligste aller Vögel geworden. Ein gewitzter alter Spatzenhahn (9) läßt sich vom Menschen nicht so leicht übertölpeln. "Vogelscheuchen" ? Man kann gar nicht selten sehen, daß Spatzen wie zum Hohn auf dem alten Filz (10) solches Vogelschrecks behaglich Siesta (11) halten, ja sie nisten sogar in den Rocktaschen des Popanzes.(12) Wenn man in Spatzenschwärme über dem Getreidefelde mit Schrot (13) schießt, erlegt man wohl mit dem ersten Schusse ein Dutzend oder mehr, beim folgenden sind es vielleicht noch eine Handvoll, vom dritten Knall (14) an aber gibt es hinfort (15) und auch die folgenden Tage nur mehr Löcher in die Luft. Ein Gutsbesitzer erzählte mir einmal, er habe die Sperlinge erst durch Steinwürfe aus seinem Weizen in die Höhe gescheucht und dann in den Schwarm geschossen. Zwei- oder dreimal bewährte sich das Mittel.(16) Dann aber waren die Spatzen klug genug, bei den Steinwürfen einfach sitzen zu bleiben oder sich zu ducken,(17) und waren nur durch den Hund aus ihrer Schnabelweide (18) herauszustöbern. Wer da glaubt, auf die Dauer (19) durch den klüglich ersonnenen "Katzenschreck", einen aus Blech gestanzten (20) Katzenkopf mit grünlich funkelnden "Rückstrahlern"(21) darin als Augen, die Spatzen aus (22) seinen Kirschen fernhalten zu können, der ist im Irrtum.

(7) しつけの悪い、お行儀のわるい、やくざな、無作法な。

(8) wenn ich bildweise mal so sagen darf : 比喩的にちょっとそう云うことが許されるとすれば。-----というのは、großmäulig という語は「大きな口をした」という具体的な意と、「大きな口をきく」、「口はばったい」という比喩的な意とがあるから。(もちろん、雀のことゆえ、「口やかましい」という意のつもりであろう。べつに大言壮語というほどのこともないのだから、本当はちょっと不適當な用語である。)

(9) Spatzenhahn : Spatzenmännchen.

(10) Filz, m. Filzhut (フェルト帽)の意。

(11) Siesta, f. 昼寝。

(12) Popanz, m. Vogelscheuche (案山子、かがし)と同じ。

(13) Schrot : 霰弾、ばら丸。(一発打つと沢山の小さなバラ弾が散らばるようになったもの)。

(14) Knall, m. Schuß と同じ。

(15) hinfort : それから後は (fortan)。

(16) bewährte sich das Mittel : war das Mittel gut (wirksam) : wirkte das Mittel ; tat das Mittel seine Wirkung.

(17) sich ducken : かがむ。或いは畑に生えているものの中へもぐり込むことを云ったものであろう。訳の方で「おじぎ」などと訳したのは、単に面白くするためで、本当は少し狂った訳かもしれない。

(18) Schnabelweide, f. ; 文字通りには「かれらのくちばしに糊する場所」、つまり「後馳走の在り場」をいう。これは、此の場所で勝手にこじつけて作った語で、単に「畑」(Feld)と云えばよいところを、語を変えるために斯う云ったのにすぎない。こんな語は、訳の時には、ぬかす方がよいことが多い。

(19) auf die Dauer : 長い間。(当座は利くが、『長い間には』利かなくなる、の意で用いたもの) 英 : at length ; in the long run ; 仏 : à la longue.

(20) stanzen : ブリキなどを、型にあてがって、たたいて色んな形にすることを云う。

(21) Rückstrahler : 昼間でも夜間でも少しでも光線があたると反射して猫の眼のように微光を発するようになっていくガラスのこと。よく、交通標識のように用いてあるのを街頭でも見かけるやつ。

(22) aus : これは本当は von と云った方が正しい (fernhalten von.....ゆえ) のだが、原筆者の通りにしておく。

と云ったようなわけで、雀は、時とともに、あらゆる鳥類のうちで最もヤクザな、最も

スレッカラシの、最も横着な、そして-----これは勿論比喩的な意味においてであるが-----最も口幅ったい鳥になってしまった。智慧のついた老獺な雄雀になると、そうオイソレと人間の手なぞには乗らない。「案山子」なんか屁とも思わない。現にそういう鳥おどしにかぶらせた古ぼけた帽子の上にチョンととまって、まるで人を馬鹿にしたようにのんきに昼寝している雀を見掛けることがある。それどころか、案山子の上着のポケットに巣を造るといふ横着なのまでいる。穀物畑に群がってくる雀にむかって散弾をぶっ放しても、最初の一発は一ダース或いはそれ以上、第二発ではまだ手の平にのるほども打ちおとすかもしれないが、第三発目からは、またその次の日から後は、たかだか空気に孔があくぐらいなものだ。田舎に地所を持っている或る人から聞いた話だが、雀を撃つ時に、まず最初石をなげて雀を麦畑から飛び立たせ、そこをねらってズドンとくらわせた。ところが、二三度までは効目があったが、雀もさる者、その次あたりからは、石を投げても一向腰を上げず、ヒョイとお叩頭[こうとう]する位なもので、犬でもけしかけないと飛び立たないという話だった。だから、いわんや、例の「おどし猫」、即ちチカチカと緑色の閃光を発する射光ガラスの眼玉をつけたブリキ細工の猫の頭なんて巧者なものを備えつけたら雀が桜ん坊に寄りつかなくなるとでも思う人があるとしたら、大きなあて違いである。

Das Üble ist, daß der Sperling sich keineswegs an der bloßen Stillung seines Hungers genügen läßt. Als sitze ein besonderer Zerstörngskobold in ihm, als lege er es absichtlich darauf an,(23) den Menschen zu verdrießen, zupft er im Frühling im Garten die ersten gelben Krokusse aus dem Erdreich, verbleißt er die jungen Knospen der Kirsch- und Apfelblüten und reißt sie von den Zweigen, plündert er im frühen Sommer die Zuckerschoten,(24) und auch von den Kirschen sind ihm nur die besten gerade gut genug.(25)

(23) es auf ~ anlegen : これは「~を狙う」、「~を目標とする」という熟語で、同意の es auf ~ abgesehen haben と同じく、es という語にはべつに意味はない。(いわゆる「填詞 [Expletiv]」である) es auf ~ angelegt haben と、完了形にして用いることもある。

(24) Zuckerschoten : 隠元豆。(隠元豆の名はいろいろある : Zuckerbohne, Zuckererbse, Gartenbohne, Puffbohne, Sichelbohne, Streifbohne 等々。)

(25)sind ihm nur die besten gerade gut genug : これはちょっとむつかしいかも知れない。結局の意は、口が贅沢になってしまつて、好いのから好いのからと平らげてしまうことを云うのであるが、この Das beste ist einem gerade gut genug という句は文字通りに訳すると「最良のものさえ、或人にとって、やっと及第といった程度である」ということになる。此の句は、「気むずかである」とか「贅沢である」とか「よければよいほど結構」とか、「欲を云わせておけばきりが無い」とか云つたような色々な場合に用いる有名な句なので、この場合なども、つい用いただけの話である。

殊にしまつにいけないのは雀をいうやつは、単に空腹を満たすだけでは承知しない。なにかコウ、特殊な破壊魔とでもいったようなものを体内に宿しているとでもいうか、それとも、わざわざ人間を口惜しがらせるというところに彼等の狙いがあるとでもいうか、春先になると、やっと芽を出したばかりの黄色いサフランをつつき出してしまう、桜の花や林檎の花の蕾を噛みつぶして枝からもぎ取ってしまう、初夏の頃になると隠元豆を荒す、桜ん坊などに至っては、好いのを好いのをと選んで食い散らすという始末である。

Um eine Vorstellung von der Größe des Schadens zu gewinnen, den zumal die Land- und Gartenwirtschaft durch den Sperling erleidet, muß man wissen, daß der Spatz im Jahre drei bis vier Bruten(26) mit je vier bis sieben Eiern hat. Die ersten Jungen sind in milden Wintern bisweilen schon Mitte Februar da, werden bald selbständig und schlagen (27) sogleich zu den andern Altersgenossen, um gemeinsame Beutezüge zu unternehmen. Dazu kommt, daß (28) er mittelbar durch das Vertreiben nützlicher, insektenfressender Singvögel schädlich wird. Es scheint ihm viel bequemer, Meisen und Stare aus ihren Nisthöhlen herauszubeißen, sich die vom Menschen zum Vogelschutz geschaffenen Nistkästen nötigenfalls (29) mit Gewalt anzueignen, als selber ein Nest zu bauen.

(26) Bruten : Brut, f. の pl.-----動物が何匹かの仔を生むと、その何匹かを一括して eine Brut と云う。つまり一回分のお産である。

- (27) zu ~ schlagen : は~に合流する、~の仲間になる。
(28) Dazu kommt, daß..... : 「加うるに」、「かてて加えて」、「その上おまけに.....」。
(29) nötigenfalls : 「必要とあれば」、「なんなら」、「いざとなれば」 (notfalls, erforderlichenfalls, vorkommendenfalls, gegebenenfalls, im Notfall, wenn es darauf ankommt.)

殊に田畑、茶園の雀によって蒙る被害程度がどの範囲にまで及ぶかということは、いったい此の雀をいうやつは年に三回乃至四回孵化[ふか]し、その一回毎に四箇乃至七箇の卵が孵えるということを考えてはじめて其の全貌がはっきりして来る。比較的温暖な冬には、時とするとすでに二月の半ば頃に先ず第一期の仔雀が現れ、忽ちのうちに一人前になり、ほかの仔雀の群に加わって其の辺一帯を荒し廻る。その上おまけに、害虫を食って益をなす鳴禽類を駆逐することにやって、間接的にも害をなすのである。やまがらやむくどりを彼等の巣の中からつつき出し、人間が鳥類愛護のために設けておく巣箱を、要すれば実力行使手段に訴えて乗っ取る方が、自分で巣を作るより楽だと見える。